

(体育)

仲間とともにすすんで運動に親しむ子どもを育てる ～基礎的な動きや技能を身に付け、「できる」喜びを味わう体育科学習を目指して～

大阪市立矢田西小学校

1. 研究主題設定の理由

本校では、「人権尊重の精神を基盤にした人間性豊かな児童を育成」を教育目標に掲げ、「基礎的な学力を身に付けようとする児童の育成」「自分のよさを発揮する児童の育成」「人権を尊重し、行動できる児童の育成」「違いを認め合い、共に生きる児童の育成」をめざして、日々教育活動の実践を積み重ねている。

本校の児童を見ていると、普段の学校生活では、休み時間に行っている遊びについても、運動場で元気に遊ぶ児童は限られていることや、サッカーやバスケットボール、ドッジボール、鬼ごっこなどをして遊ぶ児童は多く見受けられる一方、鉄棒や一輪車、竹馬、雲梯、ジャングルジム、なわとびなどができる環境にあるにもかかわらず、ごく少数の児童だけが遊んでいるだけか、体育科で取り上げた時期だけする程度であった。つまり、運動が好きな児童と行っている運動の種類に偏りがあり、だれもが多様な運動を楽しんでいるとは言えない現状であった。そこで、このような運動能力の低下を改善していくために、体育科を通して児童たちの運動能力を高めることの意義は大きいと考え4年前から体育科を研究教科とした。体育科の学習により、できる喜びや達成感を味わう経験が、「運動をすること自体が楽しい」といった児童たちが増えることにつながると考え、主題を「仲間とともにすすんで運動に親しむ子どもを育てる」とし、基礎的な動きや技能を身に付け、運動ができる喜びやできた達成感を感じることで、すすんで運動する児童たちを育てることを目的として研究を進めることにした。最初の2年は、領域を設定せず、指導者側の様々なアプローチや、授業内容の工夫を行ったり、体育主任を中心に校内体力向上委員会を設置し、児童の体力増進に一助となる研修や児童集会を計画、実行したりして、児童の体力向上に努めた。3年目は、領域を「器械運動」および「器械・器具を使つての運動遊び」に絞り自分の体の動かし方を学ぶことを目的とした。そして、本年度は、縦の系列をはっきりさせ、効果的な指導ができるようにするために、低・中・高で単元を統一することとした。さらに、日常的に運動に取り組む児童を増やすために、「鉄棒運動」に目を向け研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

本校の児童を見ていると、個人の運動をコントロールする力の弱さを痛感する。特に高学年になると、与えられた課題に対し、技能レベルが到達しておらず、うまく体を動かすことが難しく、満足感を得ることができない児童も多い。さらには、何度挑戦してもうまくいかないという学習の悪循環に陥り、その結果、「運動すること自体がいや」といった思いをもつことにつながってしまう。特にこの傾向は「器械運動」の領域において顕著にあらわれた。そこで、研究主題に迫る視点を統一し、全学年系統立てた指導計画の実践をすることにも視点をおき、研究の中心として行う運動領域を「器械運動」および「器械・器具を使つての運動遊び」に絞り、さらに研究を深めることにした。器械運動では、自分の体の動かし方を学ぶことが学習の中心的内容になる。運動の苦手な児童や消極的な児童の「運動のつまずき」は明確に現れる。まずは、指導者である私たちは、運動のつまずきを見抜く目をしっかりとともつ必要がある。そして、目指す動きが「できない」児童たちに、どのような言葉がけをするのか、どのように補助を行っていくのか、どんな場を設定するのか、どのような感覚づくりやスモールステップの運動を与えていくのか。これらのことは、どの児童たちにとっても大切な視点であり、私たちが行うべき支援であると考え。また、領域を絞ることで、6年間の系統性をはっきりさせ、効果的な指導ができると考え、さらに器械運動で私たちが学ぶ指導法は、児童たちの側に立った支援であり、他の運動領域においても、児童の動きの修正や新たな動きを作り出す際にはベースとなるものであると考え、実施した結果児童の体力向上に努めている。

3. 研究の概要

主題設定の理由で述べたとおり、幼いころから体を動かした経験が少ない児童は、基本的な動きを行うことが難しく、体育の学習にも苦手意識をもっている。その児童が、運動することは楽しいと感じられるようにしなければならない。このような児童へどのように学習を組み立てていくかは、「すすんで運動する子どもを育成する」ための鍵である。友だちと協力することで体を動かすことが楽しいと実感できるようにしたいと考える。また、体育科学習の中では、互いのできばえを認め合うこと、仲間の動きに目を向けること、できる喜びを分かち合うことなどの活動を通して、次の自分自身への動機付けにつながると考え、視点を「**運動が苦手な子どもや消極的な子どもへの手だてを工夫する**」と設定した。この視点をもって、学習の中で様々な工夫をしながら主題に迫ることとする。それぞれの学年、学級の発達段階や実態に合わせて以下のようなアプローチで学習過程の構想を立てていくことにする。

- ①子どもたちが学習のめあてをもつことができるように工夫する。
 - ・個人やチームの力にあった課題設定の工夫をどうするか。
- ②一単元時間と一時間の学習の流れを工夫する。（学習過程を工夫する。）
 - ・子どもに見通しをもつためのオリエンテーションにおける工夫
 - ・「はじめ」「なか」「まとめ」の工夫
- ③学習カード・資料を工夫する。
 - ・学習の場で提示する資料や学習カードの内容の工夫
- ④運動が苦手な子や消極的な子どもへの手だてを工夫する。
 - ・運動の場作りの工夫
 - ・課題設定の工夫（B基準の設定の仕方、めあてとする動き、技の設定の仕方）
 - ・運動の特性を守った学習内容（ルール、練習の道筋）の工夫
 - ・苦手な子どもへの直接的な支援の仕方（言葉かけ、補助、関わり方）
 - ・苦手な子どもの心情面の把握
 - ・感覚づくりの運動
 - ・協同的な学びの場の工夫

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 体育を中心に取り組んできたことにより、運動が楽しいと思える児童が増えた。運動が楽しいと思える子どもは、学ぶ事に興味関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組むとともに、「自分もできる運動がたくさんある」ことを体感することで、自信をもち、さらに自らの学習をまとめ振り返ることで次の学習につなげる『自主的な学び』が実現できた。
- 子ども同士が教え合い、助け合いながら活動する中で、新たな考え方に気がついたり、自分の考えを広げ深めたり「対話的な学び」ができた。
- 鉄棒強調週間の実施を行うことで、「回転する楽しさ」や「技ができる喜び」を味わうことができた。以前よりも鉄棒に向かう子どもが増えた。今後も、継続して実施することで、「運動することが楽しい」「体を動かすことが好き」という児童を増やしていきたい。

(2) 今後の課題

- 今後も、体育的行事や、児童会活動、休み時間の過ごし方、業間体育の取り組みなど、その実施の内容について、さらに工夫と努力を続けていくことが必要。
- 子どもたちの体力・運動能力の低下に歯止めをかけること、学校生活から家庭生活へと豊かなスポーツライフを実現するための資質や能力を育成することを目指し必要がある。